

十 家貧にして道貧ならず

以上の如く説き去り説き來つて茲に至る、吾人は忽ちにして眞理を得たり。曰く、「家貧にして道貧ならず」身を貧賤に置きて、心を富貴ならしむ、是に上越した處世法はありません。私共我身を見れば餘りに淺間しい、けれども是が爲に、加えられたる大悲の矜哀を想へば、感泣して満足せずに居られぬ。嘗て長州六連島の女同行お輕は、彼の法悦を慕うて尋ね來れる人に、「六連島は貴女のために、法義盛でせう」と聞かれ、「一向存じませぬ」と云へば「是は怪しからぬ」との答に對し、「六連島の法義如何は一向存じませぬが、お輕が胸の中は、何時も御法義繁昌」と。此人胸を突かれ隨喜せざるを得なかつたと傳ふ。お輕は身貧賤にして、常に薪を荷ひつゝも、心は常に淨土に遊んで居ました。富なる哉賢なる哉、お輕の心事。

さはいへ、是が道理々屈に迷ふ見惑は、斷じ易きこと破石の如く、是が實行に迷ふ思惑は斷じ難きこと、藕絲の如く、難い哉、我等の實踐體得。

世の中に酒と女は敵なり、どうぞ敵に巡り會ひたい

夢と思へば何でもないが、そこが凡夫でネーあなた

諦められぬと諦めるより外仕方のない、我等の心情。覺めずや驚かずや、慈光に夜は明けたりな。「淨業内に薰じ、慈光外に攝す」有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に遊びぬるよな。

支那明末に於ける佛敎界の明星、雲棲大師珠宏は、自ら自警の詩を作つて之を座右に貼つて、衣食住に就いて、警策とせられた。

屋可蔽「風雨」何苦鬪「華麗」堯舜古聖君 光澤天下被
茅茨未「嘗剪」土堦亦不「斫」不知爾何人 鱗々居「大第」

これは其の先輩慈受禪師の作にして、已下の三首は自作である。

食可充^レ餓長^一 何苦尙^レ腴靡^一 孔顔古聖師 悅^レ心飽^二義理^一
 一^レ簞復^二一瓢^一 飯^二蔬食^一飲^レ水 不知^レ爾何人 肥^レ甘滿^二砧几^一
 器可^レ足^二使令^一 何苦作^二淫巧^一 釋迦三界師 萬德備^二天藻^一
 一^レ持^二鉢多羅^一 四綴猶不^レ了 不知^レ爾何人 杯箸嚴^二七寶^一
 衣可^レ蓋^二形體^一 何苦競^二文飾^一 迦葉首傳燈^一 聞譽千古溢^一
 頭陀百結鶉 老死遂不^レ易 不知^レ爾何人 徧身皆綺縠^一
 一見消極にして消極にあらざ。「知らず爾は何人ぞ」。随分皮肉つたものである。この皮肉に感奮興起せば、乃ち大の積極。所詮「身貧にして道貧ならずの境に入り、進んでは身心共に富満なるに至らんは、蓋し易々たるのみでないか。」「君子は貧賤に處して貧賤に行ひ、富貴に處して富貴に行ひ、艱難に處して艱難に行ふ」と。これも心一つの据ゑ處です。

然り而して、斯の如き事は仲々に到り難い。到難いのは心が濫太いからである。濫太いのは昨日や今日ではない、是は久遠劫來の焦付である。誠や唐朝の善導師が、我が身心を押へて「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫」と自覺し、推して以て「曠劫已來常に没し常に流轉す」と過去の自己を見、從つて「出離の縁あることなし」と深信せられし處、今日の私共に異議の申様なき、衷心の告白である。之と同時にこの「衆生を攝受して」定めて往生せしめ給ふ彌陀願力の尊さよ、強さよ。於是、私は三世の業障一時に消滅して不退の位に入り、佛果圓滿の境に到り、「極樂池中七寶の臺」を家郷となす幸福を得る。人生の究竟目的、豈夫れ他にあらんや、他にあらんや。私共は今此處にありながら、心は如來淨土の市民たり得るのであります。



哲人ソクラテスの妻ザンチップは有名な悍婦。或日祭の行列が通る。見

行きたいが着物が無い。彼はわしの上衣を着て行くがよいと云ふ。いやだと駄々。彼冷然として「お前は見にゆきたいのか、見られに行きたいのか。」アルシバイダデス彼に、細君の餘り口喧しくて聞くに堪へぬと云へば、「鷺鳥が鳴くのは氣にならぬ」。「でも鷺鳥なら卵を産んでくれる」彼笑つて曰く「ザンチツプも赤兒を産んでくれる」。

細君散々に吼えた揚句に、彼の頭からバケツの水を浴せた、先生は「雷の後あとは雨あめのものさ」。